

昨春、資料館に一人のドイツ人女性の訪問者があった。モーニカ・ライヒ＝ヴォールファルトさんといい、かつて四高で20年にわたってドイツ語を教えられたエルンスト・ヴォールファルト Ernst Wohlfarth 先生の孫娘さんに当る。先生のご長男、つまりモーニカさんのお父さんは金沢で生まれ、同じエルンストという名だが、別に金太郎という日本人名ももらって、四高生たちを喜ばせた。この金太郎氏はドイツで高等教育を受けたあと外交官となり、戦時中再び来日して、神戸の総領事館で副領事をされていた。モーニカさんは、国際ドイツ年の機会に、幼き日々を過ごした懐かしい神戸に招待されて来日され、金沢へも一日足を延ばされたというわけである。お祖父さんを偲ぶすがを求めての金沢大学訪問だった。資料館に保管されている契約書の先生自筆サインなどをカメラに収めて帰られたという。

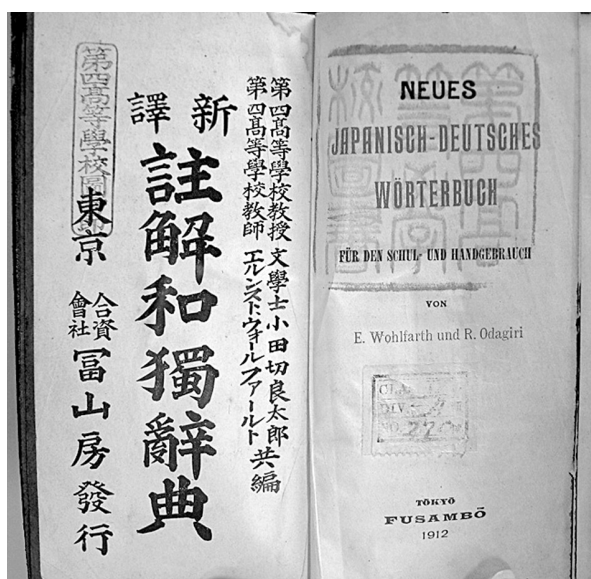
ヴォールファルトという名を耳にしても思い当たる人はそういないだろうが、日本で最



モーニカ・ライヒ＝ヴォールファルトさん

初の本格的な和独辞典の共編者としてもその名をとどめている（小田切良太郎、E・ヴォールファルト共編『新譯註解和獨辞典』1912年、富山房）。履歴書に見るかぎり、教員養成学校を出て、小学校教員になり、とくに言語の専門家というのではないから、ドイツ語のネイティブとして、四高同僚の小田切氏に請われて協力されたものであろう。7年に及ぶ熱心な共同作業の末に辞典は完成した。高等学校の生徒たちに使ってもらうことが何よりも目標だったにちがいない。現在金大図書館にも2冊残っている。中国の地名をドイツ語表記した一覧表が付いているところなど今となっては珍しく、ドイツが中国に植民地を領有していた当時の時代相をとどめている。私個人としても、ローザ・ルクセンブルクの文でいくら調べても分らなかった中国の都市名が、そのおかげで特定できた思い出がある。

私が最初にその名を知ったのは、中野重治のエッセイでのことである。ヴォールファルトというのは「福祉」というような意味の普通名詞に由来するから、「先生の名前は変じゃないですか」と面と向かって言う生徒もいたらしい。中野は1919（大正8）年四高に入学、二度落第して、1924年春卒業した。この頃の



小田切良太郎、E・ヴォールファルト共編『新譯註解和獨辞典』1912年刊、中扉（金大図書館蔵）

高等学校は帝国大学の予備課程という性格が強く、とりわけ外国語の学習に重きが置かれていた。彼が入学した文科乙類はドイツ語を中心としたクラスで、一週間にドイツ語が11時間もあり、英語も8時間あった。中野はヴォールファルト先生から、1921年夏にドイツに帰国されるまでずっとドイツ語会話を習った。卒業後は、帝大のドイツ文学科に進み、とりわけハイネと親しんだ。この学生時代には国際労働者救援会の組織づくりにやって来たドイツ人のために通訳まがいのこともしたというから、このあたりになると、かなり先生の恩恵を被っていそうだ。彼の蔵書は福井県の丸岡町民図書館に納められており、アト・ランダムに抜き出すと、余白にドイツ語の書込みのある本に結構お目にかかる。残された四高での成績表から見れば、さほど出来がよかったとは言えそうもなく、自分でも自信なげな言葉を洩らしているが、ドイツ語への愛着は強かったようだ。「たいへん善良な人で、いい生徒からも悪い生徒からも親しまれていた」とヴォールファルト先生について中野は書いているが、ひとつには注意点なんかを滅多につけぬというためでもあったとそこに書き添えているところなど微笑ましい。だが、ほんとうにみんなに親しまれていたことは、いよいよドイツへ帰国されることになったとき、誰が音頭を取るというのでなく、先生からドイツ語を教わった在校生400人が集まって、市の公会堂で送別会が開かれたことにもうかがえる。

中野のエッセイは「先生の息子」（『中野重治全集』第26巻所収）という表題である。たまたま手にした新聞に、金太郎氏が副領事に着任したことを伝える記事が出ていて、20年前の記憶が甦り、それが機縁になって書かれたようだ。草原に腹ばいになって級友とと

めどないおしゃべりをしていると、少し離れたところを睦まじそうに話しながら先生の一家が通りかかる。すると子供が何かで駄々をこねている様子と見え、先生が力をこめて説教しているふうである。やがて手を振上げ子供の尻をぶつ先生を見る。「この光景は、ふたりの怠けものの生徒に心にしみて受けとられた。それは教壇の先生ではなかった。」と中野は書いている。「心にしみて受けとられた」のは、ひたすら異国人として接していた先生が見せた思いがけぬ普通の父親としての姿だったろうか、それとも教壇でと同じく何事にも真剣に対処する先生の姿だったろうか。いずれにせよ、これがエッセイのいわば原風景である。先生をいっそう身近に感じたのだろう、おしゃべり仲間の二人は、送別会の後、先生を自宅に訪ねる。帰り際に、級友が彼の妹手づくりのきれいに彩色した麦わらの小箱を、中野のほうは、「大胆というか不敵というか」と自分で書いているが、スケッチ板に描いた油絵自画像を贈り物としてさしだした。すると先生は「いつかおまえがベルリンへ来るならば、おまえはこれを、ふたたび私の書斎に見出すであろう。」というようなことを言われた、とある。

エッセイのきっかけは金太郎氏の副領事着任の記事だったろうと書いたが、そしてやはりそうにちがいないが、中野はその2年前に彼の代表作とも言える小説「歌のわかれ」を書き、自らの金沢四高時代をその材料にしていた。だから、彼の頭の中には若き日のあれやこれやの思い出がそうでなくともひしめいていただろう。そう言えば、すでにこの作中にヴォールファルト先生らしきドイツ人教師がヴォルフという名で顔を出すところがある。いかにも見え見えの命名ではある。読む側から言えば、どんな名前であろうが関係ないよ

うなものだが、記憶をそのまま生かして書くことの多いこの作家の執筆風景がちらと覗けて見えるようで、これはこれで面白い。エッセイは、子供の尻をぶつ先生の姿を核に、もうひとつ、尻をぶたれていた子供が成長して外交官として姿を現したのに驚いた、時の経過への思いがそこにからまっている。

中野は「その後何年間かは気になって仕方のなかったあの汚い絵のことも、もう気にもなくなってしまう。」と書いているが、絵はどうなったのだろう。先生にしても、書

斎で額縁の中から自分を見つめている日本での教え子がその後ハイネについての本を書き、さらに小説を書いて、その中に自分らしい人間が登場するなどとは思いつかべることもなかっただろう。中野が初めてドイツを訪れたのは1965年のことで、この年5月ベルリンとワイマルで国際作家集会が行われ、それに参加するためであった。しかし、知るや知らずや、先生はすでに1956年に亡くなられていて、中野がその書斎にふたたび絵を見出すことはなかった。

#### ●写真説明

表紙写真：「ヴォールファルト先生送別記念写真 1921年7月 四高正面玄関前」  
前列中央ヴォールファルト先生、右端中野重治（中野重治夫人原泉さん提供）

---

### 平成17年度金沢大学資料館特別展「科学技術史研究の卵たち」 金沢大学資料館公開講演会「保存された四高物理機器」について

---

金沢大学資料館では特別展「科学技術史研究の卵たち」を、平成17年10月31日から11月11日まで資料館展示室で開催した。来館者数285人。

図書は保存されるが、実験機器は保存されることが少ないのが現状である。そのような中で四高物理機器が移転という危機を何度も乗り越え現存しているのは、保存しようとする強い意志が働いていたからに他ならない。

この四高物理機器は百年以上保存され、すでに「科学技術史資料」と言っていってよいであろう。しかし、今年度小立野キャンパスから角間キャンパスに移転してきた工学部の実験機器等はまだその年数には至ってはいない。これから保存していくことで「科学技術史資料」になる卵たちである。今回はこれら四高物理機器と工学部の実験機器を中心に展示をした。

またこの他、洋学の導入に伴い幕末の藩校において自然科学教育に使用された書物、実験機器を使用していた工学部の前身校金沢高等工業学校関連資料も合わせて展示した。

今回の特別展はテレビや新聞に取り上げられたことで、多くの入場者があった。

公開講演会「保存された四高物理機器」は特別展期間中の11月9日、本学名誉教授竹村松男氏が中央図書館 AV 室にて講演を行った。来聴者数33人。

講演内容は四高物理機器の保存に尽力された、竹村先生が、先人の跡をついでどのように保存してきたかを丁寧に講義され、講演者と聴衆が一体となるなごやかな雰囲気での講演会であった。

この講演要旨は『金沢大学資料館紀要No.4』に掲載する。  
(資料館 田嶋)

